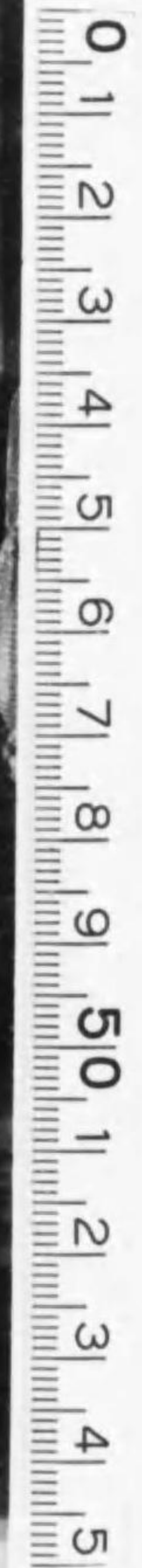




官幣大社 氣比神社 敦賀港

特261
579



始





#261
579



美古仰
天皇

紀元二千六百
二月十一日佳節日

木
篤
謹
呈

題字 栗本勇之助氏

官幣大社氣比神宮由緒略記

祭 神

本 宮 伊香沙別命、帶仲津彦命(仲哀天皇)、息長帶姫命(神功皇后)、東殿
 宮 日本武命、總社宮 譽田別命(應神天皇)、平殿宮 玉姬命、西殿宮
 武内宿禰命



由 緒

右七柱の祭神は一柱毎に官幣大社の奉幣に預る、誠に天下無双の奉幣なり。
 氣比神宮は時に北陸道總鎮守越前國一ノ宮として、其名天下に著れ
 敬篤く古來々々神異ありしを以て其都度勅使奉幣の事ありき、延喜式に
 七座並名神大座とあり、寛平五年菅原道真公勅使として参向せる時の記録には
 神附正一傳動一等とある。明治二十八年一月官幣大社に列し、同年三月神宮號
 宣下の御沙汰を拜す。



御社領についての初見は持統天皇紀増封の記事なれど、爾來増封寄進相踵ぎ源
 平時代には北陸道七國に亘り魁大なる地域を占め後に百萬石を領したりと傳へ
 られ、延元元年金崎戦争後も尙よく二十四萬石を保有したりしが、元龜元年田
 織氏のために悉く沒收せられ、慶長八年福井城主結城秀康公百石を寄進し社領
 復活したり。

謹みて按ずるに伊香沙別命は又御食津大神と稱へ奉り、太古より此池に御鎮座

にたり海陸殖産興業に將又民生守護に絶大の神徳を垂れ給ひ、又殖産の神、航海の神、武徳の神として靈顯著しく神威遠く國の内外に及べり、又一説に此命は大陸より渡來し大陸經營に神蹟を垂れ給へりと云ふ。

帶仲津彦命（仲哀天皇）は御即位後二年二月皇后及武内宿禰大臣以下百官を從へ狩飯宮に行幸し給ひ、神幣として兵器を奉り當時第一の國務たりし九州の熊襲鎮定、及豫てより我國に禮を欠きし三韓の征伐につき軍議を起し、且御祈願あらせられた。又天皇は深く此地を愛慕し給ひ、朕八州を巡見して後宮居を此地に作り水居せんと欲すと宣せらる。此に緣り三月六日御誓祭を行ふ。

息長帶姫命（神功皇后）神宮舊記によると同八年三月勅により香椎より御妹玉姬命（豐姬又は淀姫）及武内大臣以下を從へ再び神宮に御參拜兵器を獻り、重ねて三韓征伐の事を祈願給ひ、種々の神驗を蒙られ遂に彼の大業を完了し給へり。此時御發航の軍裝は今に傳へられ例年七月二十二日總參祭と稱し敦賀灣に海上神事が行はれる。

譽田別命（應神天皇）は世に八幡大神と崇め奉る大神にして胎中征韓に従軍遊ばされ、神功皇后攝政十三年二月武内大臣を從へ氣比大神を拜祭し給ふ。蓋し三韓征定についての報賽のためならん、此時大神と命と御名を易へ給ふこと古事記に見え、其に緣りて三月八日御名易祭あり。

推古天皇の御代以來屢々御神托ありしにより文武天皇大寶二年に至り勅して宮殿を修營し、九月四日 仲哀天皇以下三韓征伐御從軍の五神及天皇の御父に坐し不逞の徒討伐のため西走東奔軍事に御活動遊ばされし日本武命を併せ奉齎せしめ給ふ、是に因り例年九月四日例祭を執行す。

以上七柱の神を今の世に氣比大神と稱へ奉り現下の時局に祈請するもの極めて多く殊に御祭神の御系統御神徳御事蹟に因み大陸開發に従事するもの並に國策的事業に關與するもの、尊信頗る厚し。

- 攝末社
- 攝社 境内五社 其中式内四社
- 末社 境内十社 其中式内社一社
- 攝社 境外五社 全部式内社

表紙説明 敦賀港古圖

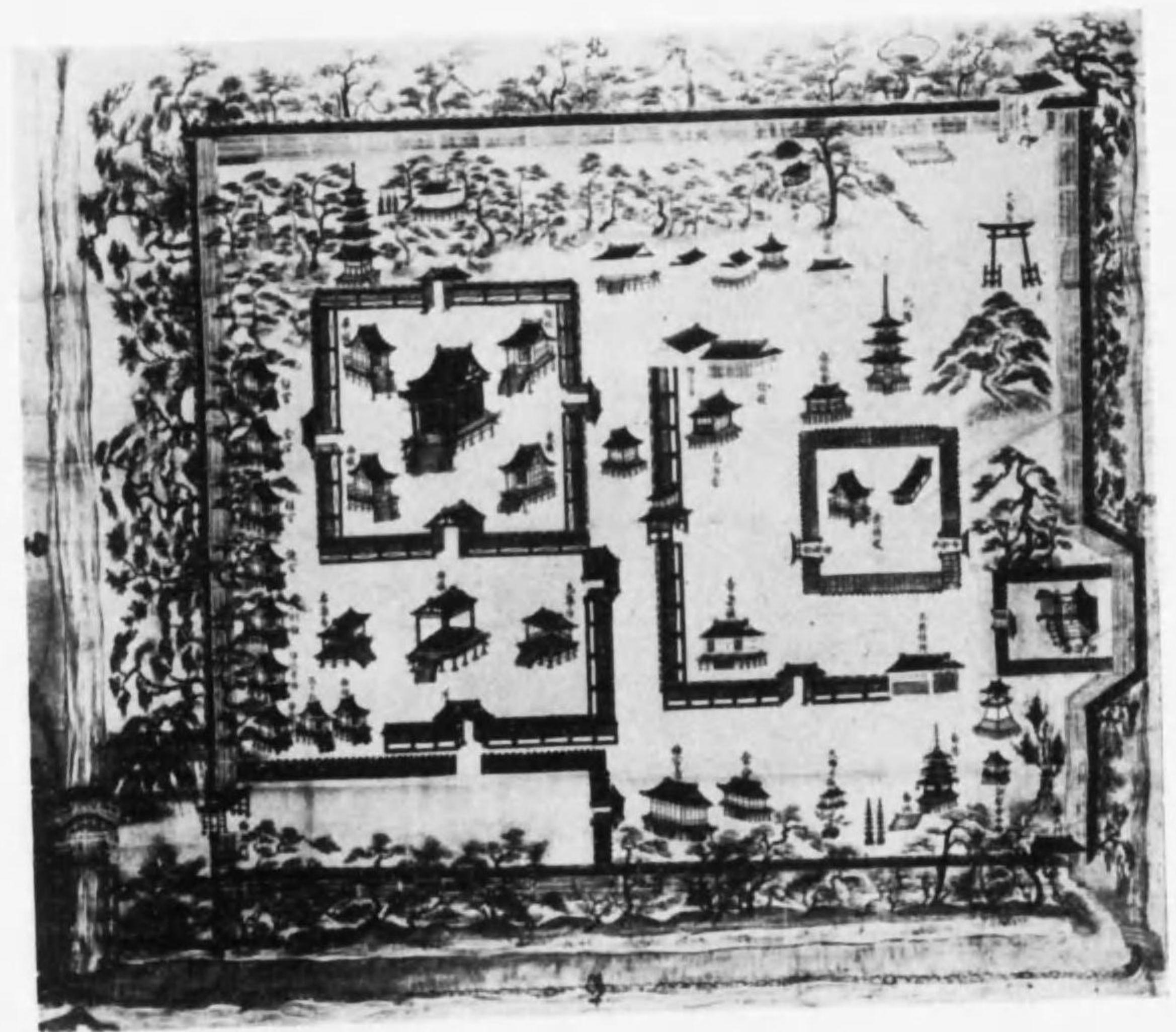
嘉永四年敦賀寄港の全圖、總漕業者より氣比神宮大前に奉納せるものにして往時敦賀港が海運の中心たりしを物語る資料たり。

裏表紙説明 國實一邇上人繪傳ノ一部 (神戸眞光寺藏)

一邇即ち時宗二世 遊行上人諸國巡歴の途次、正安三年（一、九六二）氣比神宮に參拜し其徒と共に當時裏參道たりし西道路を改修す。此の繪により今に至るも歴代の時宗普長來錫の副古式によりお鉢持行事を奉仕す。

氣比神宮古圖

時代不詳なれど全國に魁け神宮寺を創建したるは靈龜元年(一、三七五)にして延元元年(一、九九七)及元龜元年(二、二三〇)兩度の戦禍に殿宇炎上し其後神宮寺のこと見えざれば、本圖は其の間のものなるべし。

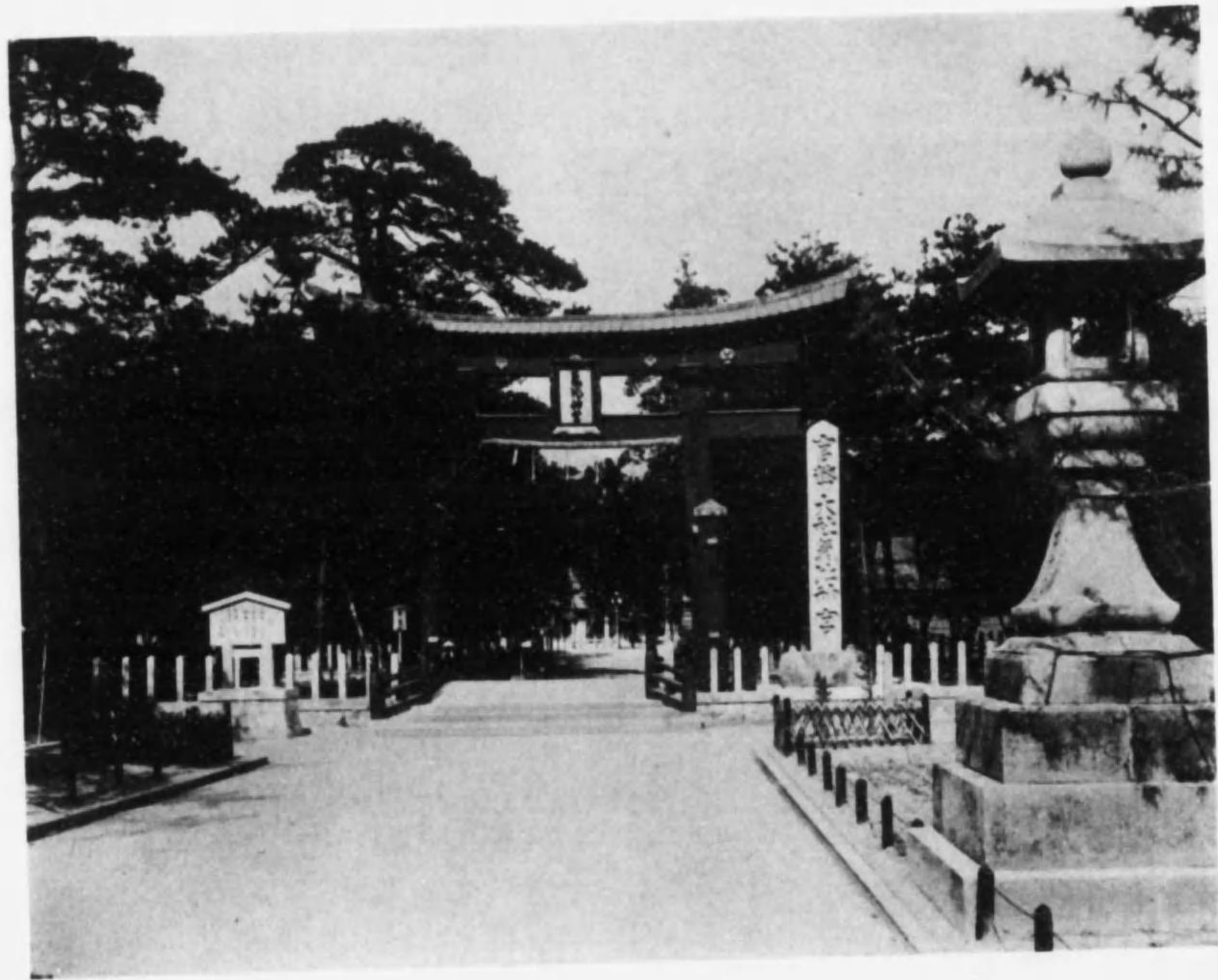


彦州縣宮古圖

彦州縣宮古圖
此圖係明嘉靖年間所繪
其時縣宮之制已極其宏敞
中設多殿宇及亭閣
其間有鐘樓及鼓樓
其外有城垣及雉堞
其內有池沼及園林
其制之嚴密
其氣之壯麗
誠為一代之冠也

表参道正面

従来大島居臨まで民家及び縣道縱横に迫れるを、最近土地を買収整理の上、水路を變更、神橋を架設し昭和十三年十二月完成す。



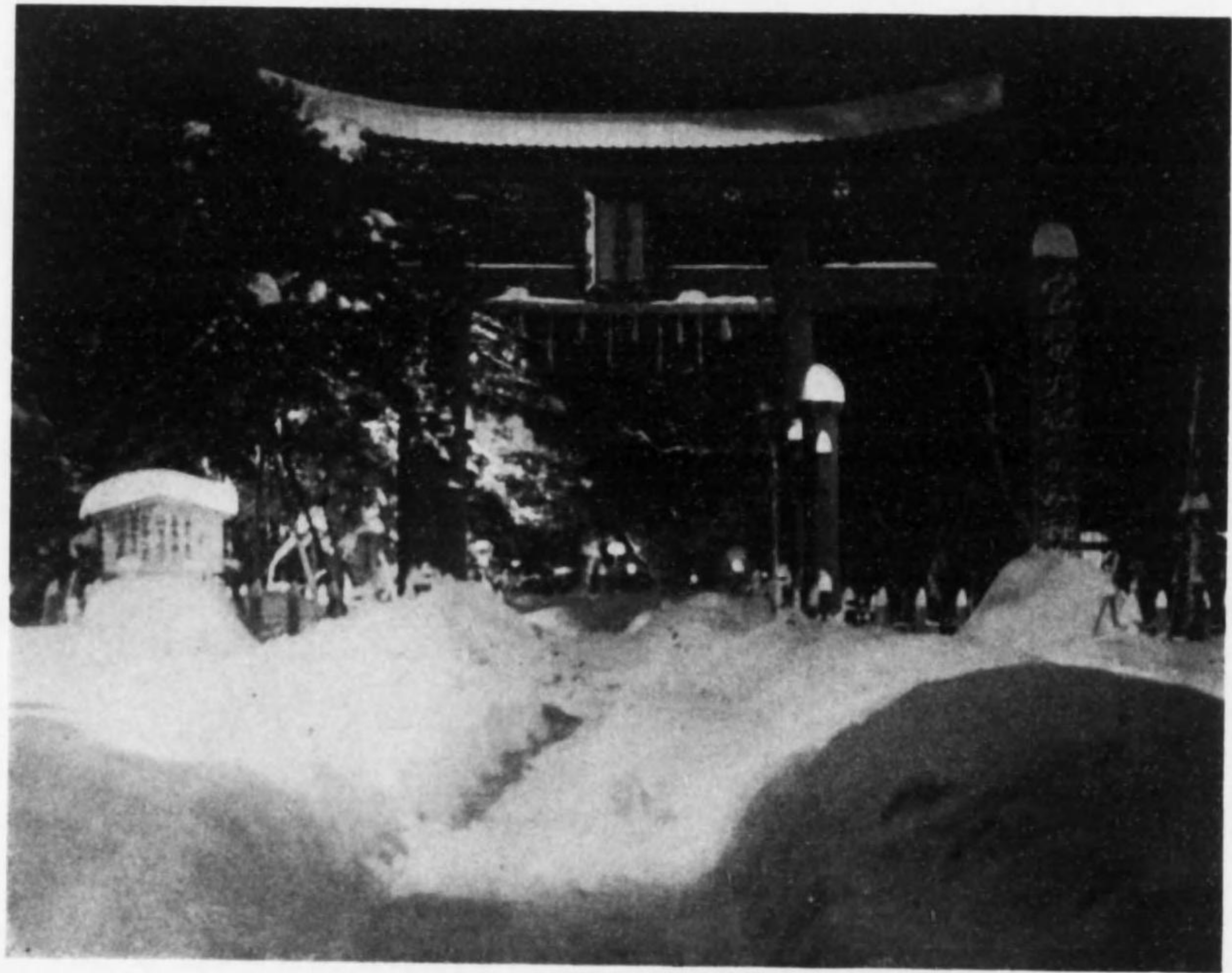
奉巻 第五面

昭和四年十一月二十一日
東京大倉町大倉山神社
撮影 上野木野野

大鳥居

高さ三十尺餘、下部柱眞々二十四尺五寸餘、木造本漆朱塗り、正保二年（二、三〇五）舊神領地佐渡國より寄進せる用材檜樹を以て建立、明治三十四年國寶に指定さる。細部に多くの特徴を有し木造鳥居の中最古の國寶建造物なり。

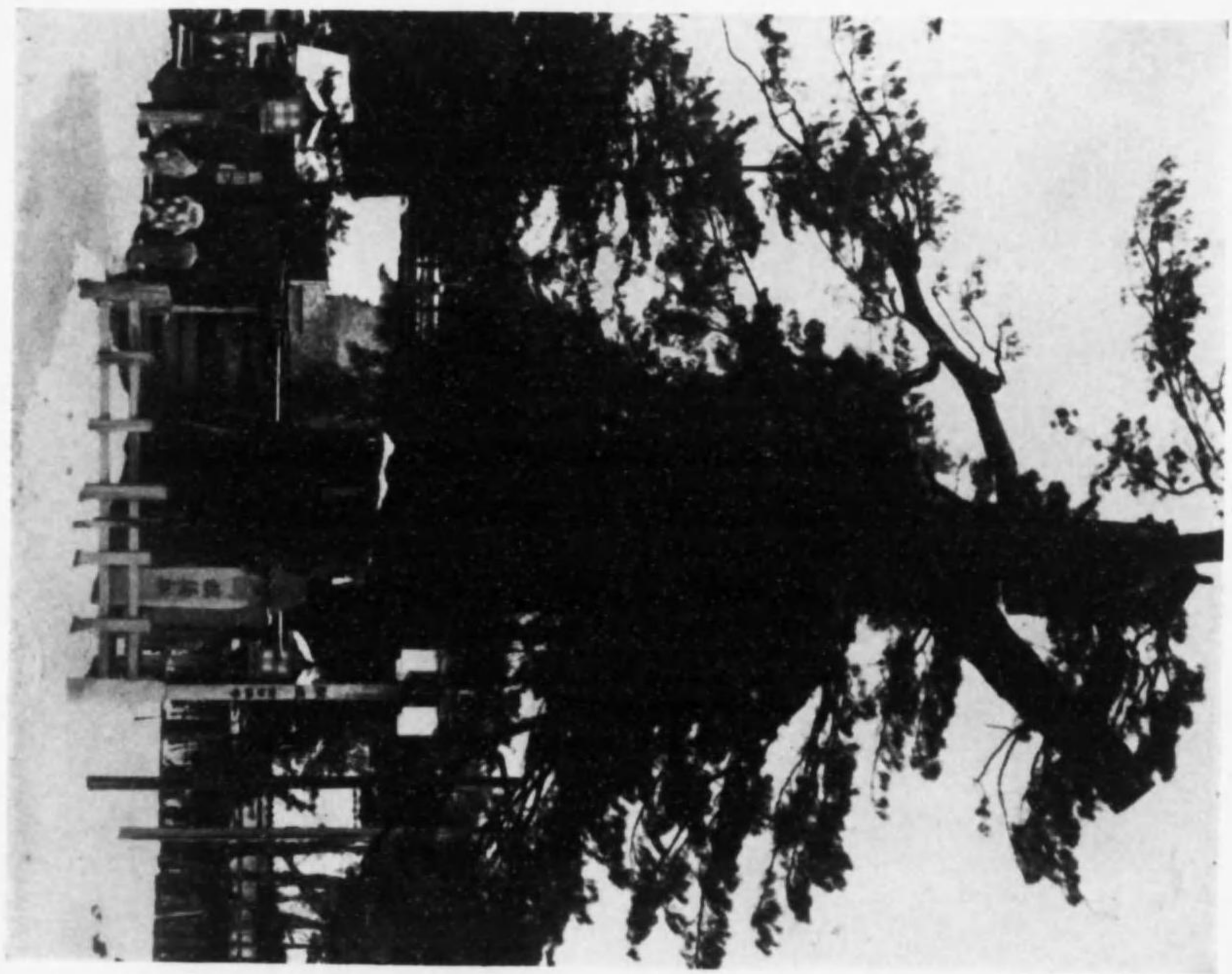
積雪の神域



遊園の静けさ

旗 掲 松

南朝哀史を物語るものにして、中鳥居前本殿正中線上に在り。延
元元年大宮可氣比氏治公此の松に錦旗を掲げ勤王の兵を募る。而
して集る數百の寡兵を以て尊良親王及皇太子恒良親王を奉じ金崎
城に據り奮戦す。

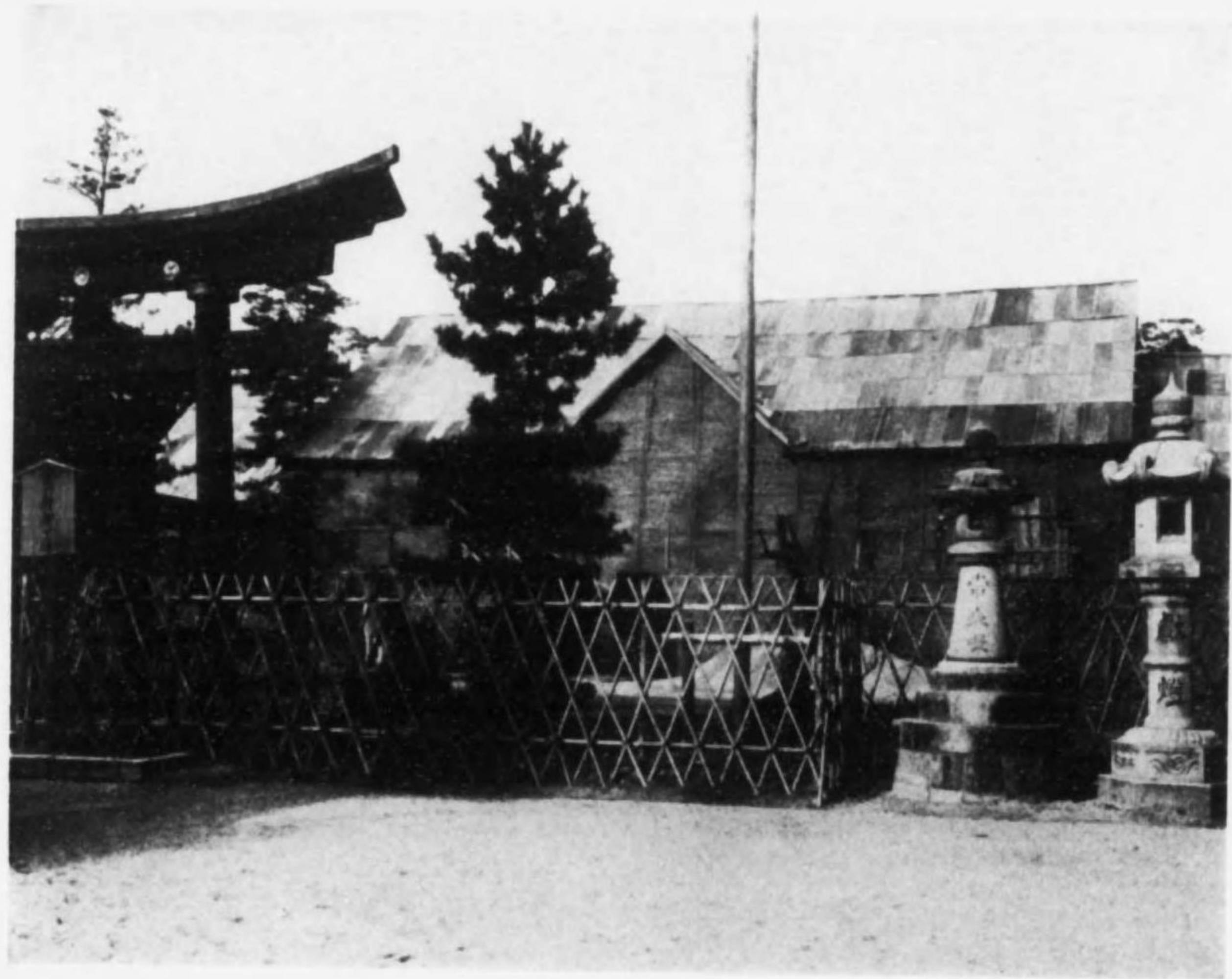


謝 辭

本書之出版，承蒙各界人士之厚愛，不勝感荷。茲將對本書出版有貢獻之人士，略誌謝忱。首先是本書之編者，即本書之全體編者。其次是本書之審定者，即本書之全體審定者。再次是本書之印刷者，即本書之全體印刷者。最後是本書之發行者，即本書之全體發行者。以上諸位，均為本書之出版，盡了心力，特此鳴謝。

中鳥居

高さ二十一尺餘、下部柱真々九尺六寸餘、木造本漆朱塗り、寶永三年(一、三六〇)若州小濱藩主酒井氏寄進建立、前方假屋は拜殿建築場。



中 農 園

此園(一)之六六(六)等小園主所共育也。園中
有(二)一以(三)于(四)其(五)以(六)上(七)等。本園本園(八)等。實水

本殿

本宮(中央)伊香沙別命、仲哀天皇、神功皇后奉齋、東殿宮(右)日本武命奉齋、總社宮(右奥)應神天皇奉齋、平殿宮(左奥)玉姬命奉齋、西殿宮(左)武内宿禰命奉齋。
以上五宮を以て本殿とし、祭神七座御同格なるは蓋し天下唯一なり。本殿は慶長十九年福井城主結城氏寄進するところ、桃山時代の遺構にして明治三十九年國費に指定さる。



本
 鏡

工事中の拜殿

桁行五間、梁行三間、左右翼廊付、本殿には祝詞會を以て續く、
凡て檜皮葺單層丹及群青彩色を以て本年三月中に完成の豫定なり

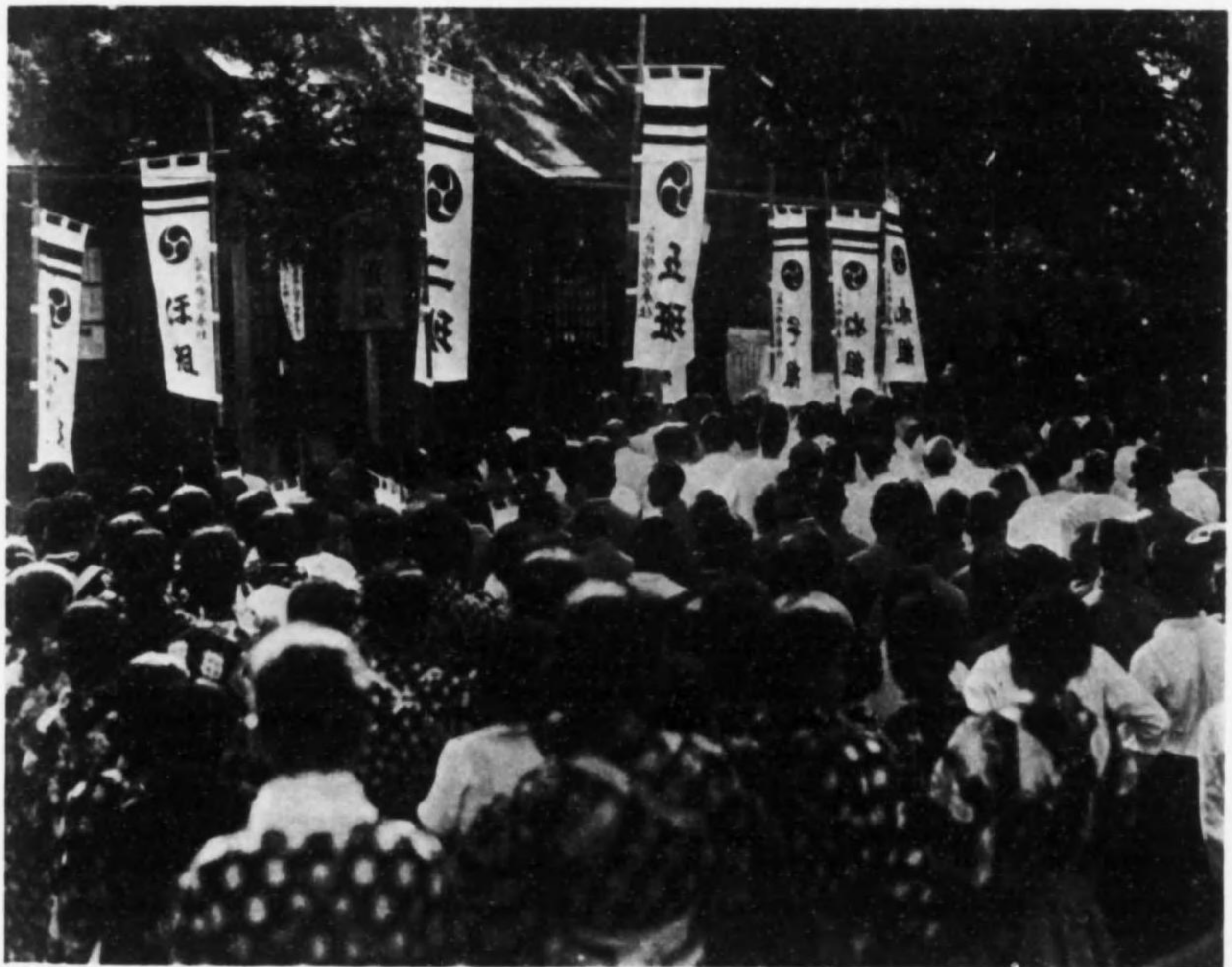


工事中の鉄骨

本館の鉄骨構造は、主として鋼材を使用せり。其の柱は、鋼管製にして、その間は、鋼材で補はれり。本館の鉄骨構造は、主として鋼材を使用せり。

勤勞奉仕(二)

昨夏八月より四ヶ月間數萬の老若男女御遺骨に勤勞奉仕す、奉仕員は組に、組は班に編成され、御神前に奉告祈請の後一日七時間の奉仕を爲せり。



山、川、海、祭りの様子

山、川、海、祭りの様子

山、川、海、祭りの様子

藤花 華 士

勸勞奉仕 (三)

表參道はもと二間幅なりしを四間幅に擴張、土盛りをなし更に齋砂を以て清装せり。



圖發卷廿二

勸勞奉仕(三)

表參道及び神域用齋砂は、海上一里の常宮濱より採取の上船車と
繼送し數日間二十五噸を搬入せり。之れ凡て奉仕作業による。

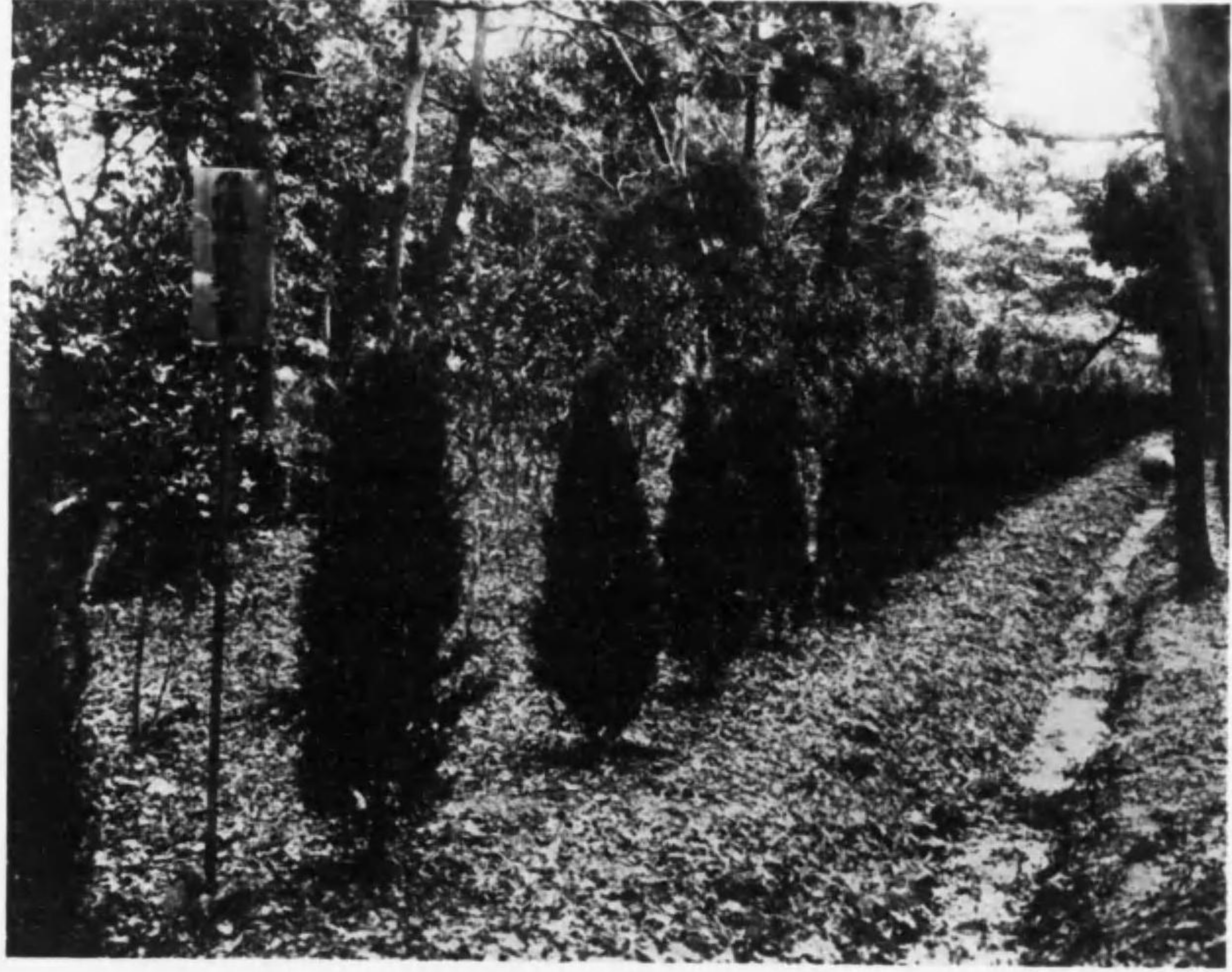


禮樂奉仕

明治二十九年四月廿一日、五月三日、五月五日、五月七日、五月九日、五月十一日、五月十三日、五月十五日、五月十七日、五月十九日、五月二十一日、五月二十三日、五月二十五日、五月二十七日、五月二十九日、五月三十一日、六月一日、六月三日、六月五日、六月七日、六月九日、六月十一日、六月十三日、六月十五日、六月十七日、六月十九日、六月二十一日、六月二十三日、六月二十五日、六月二十七日、六月二十九日、六月三十一日、七月一日、七月三日、七月五日、七月七日、七月九日、七月十一日、七月十三日、七月十五日、七月十七日、七月十九日、七月二十一日、七月二十三日、七月二十五日、七月二十七日、七月二十九日、七月三十一日、八月一日、八月三日、八月五日、八月七日、八月九日、八月十一日、八月十三日、八月十五日、八月十七日、八月十九日、八月二十一日、八月二十三日、八月二十五日、八月二十七日、八月二十九日、八月三十一日、九月一日、九月三日、九月五日、九月七日、九月九日、九月十一日、九月十三日、九月十五日、九月十七日、九月十九日、九月二十一日、九月二十三日、九月二十五日、九月二十七日、九月二十九日、九月三十一日、十月一日、十月三日、十月五日、十月七日、十月九日、十月十一日、十月十三日、十月十五日、十月十七日、十月十九日、十月二十一日、十月二十三日、十月二十五日、十月二十七日、十月二十九日、十月三十一日、十一月一日、十一月三日、十一月五日、十一月七日、十一月九日、十一月十一日、十一月十三日、十一月十五日、十一月十七日、十一月十九日、十一月二十一日、十一月二十三日、十一月二十五日、十一月二十七日、十一月二十九日、十一月三十一日、十二月一日、十二月三日、十二月五日、十二月七日、十二月九日、十二月十一日、十二月十三日、十二月十五日、十二月十七日、十二月十九日、十二月二十一日、十二月二十三日、十二月二十五日、十二月二十七日、十二月二十九日、十二月三十一日。

神苑献木

勤勞奉仕により整美されたる境内地に、紀元二千六百年を記念し
二千六百本の献木を植栽し百年後の神苑の盛衰を計畫中なり。



杉
莖
楠
木

この杉は、日本産の杉の一種で、樹高は約20メートルに達する。葉は針状で、冬は落葉しない。木材は堅く、建築や家具に用いられる。また、香りが独特で、古くから香料としても利用されている。

敦賀港の特長

- 一、日本海に面する唯一の第一重要港灣として、大陸へ連鎖の要衝に在りて、本邦北面の玄關たる重大使命を有せり。
- 一、崇神天皇の御宇朝鮮任那國皇子の來航に依り朝鮮との交通開かれ、神功皇后三韓出師當時の行幸地となり、徳川時代には日本海沿岸諸國と中央方面との聯絡港として殷盛を極めたる等、古き輝かしき歴史を有せり。
- 一、港内面積廣闊、其の水面積四百三十一萬余坪を有し相當の水深在り、河口港の如き淺深費は一切不要にして、暗礁、砂洲、漂砂の障害皆無なれば、大船、巨船の運航自在、碇繋最も安全なり。
- 一、灣内の流速緩漫にして、潮位千滿の差最大二尺、冬季日本海の時化に直面せる時と雖ども、港内在泊船舶に被害を及ぼし、又は操船困難となり發着を中止せるが如きこと全く無し。
- 一、昭和七年三月第二期築港修築工事に依り二千噸級乃至八千噸級船舶の接岸可能にして港内一萬噸級船舶の出入自在なり。
- 一、第三期擴張計畫案たる常宮灣修築の嚆には、三萬噸級乃至五萬噸級船舶の接岸可能にして、是れ、北鮮三港の相對港として、日本海湖水化實現に對し不貽貢獻しつつある、本港の特長とする所なり。
- 一、本邦唯一の歐亞連絡港にして、明治三十五年二月敦賀浦汐間航路開設せられて以來之に力を傾注すること三十有八年に及べり。
- 一、大正七年七月日本海橫斷航路開設以來、朝鮮產活牛の移入港として、家畜檢疫所の設備を有し毎年一萬數千頭の鮮牛を移入しつつあり。
- 一、工場誘致に重要條件たる水量豊富にして、地下百尺より湧出する水質極めて良好なれば、一般飲用水に適するは勿論、船舶の飲料水及養殖水として、良質の自然水を給水する港は、本邦諸港の内當港に及ぶ港無し。
- 一、燐料石炭の移入港として最好の條件を具備し、其の炭價も亦格安に利用し得べし、東

滿炭坑開發に伴ひ益々本港の使命又重きを加ふると信ず。一、萬古斧鉞を入ねざる、豆満江沿線並に東滿地方の森林開發に依る木材の移入港として、將來の利用旺盛となる情勢顯著なり。

一、工場地帯に面する、東洋紡績レーヨン工場に通ずる市設運河沿線の利用に依り、原料並に燃料の輸送に特段の便宜存せり。

一、工場設置に適する土地の廣袤三百餘萬坪有り、地價低廉にして種々利便の提供と特權を付與せらる。

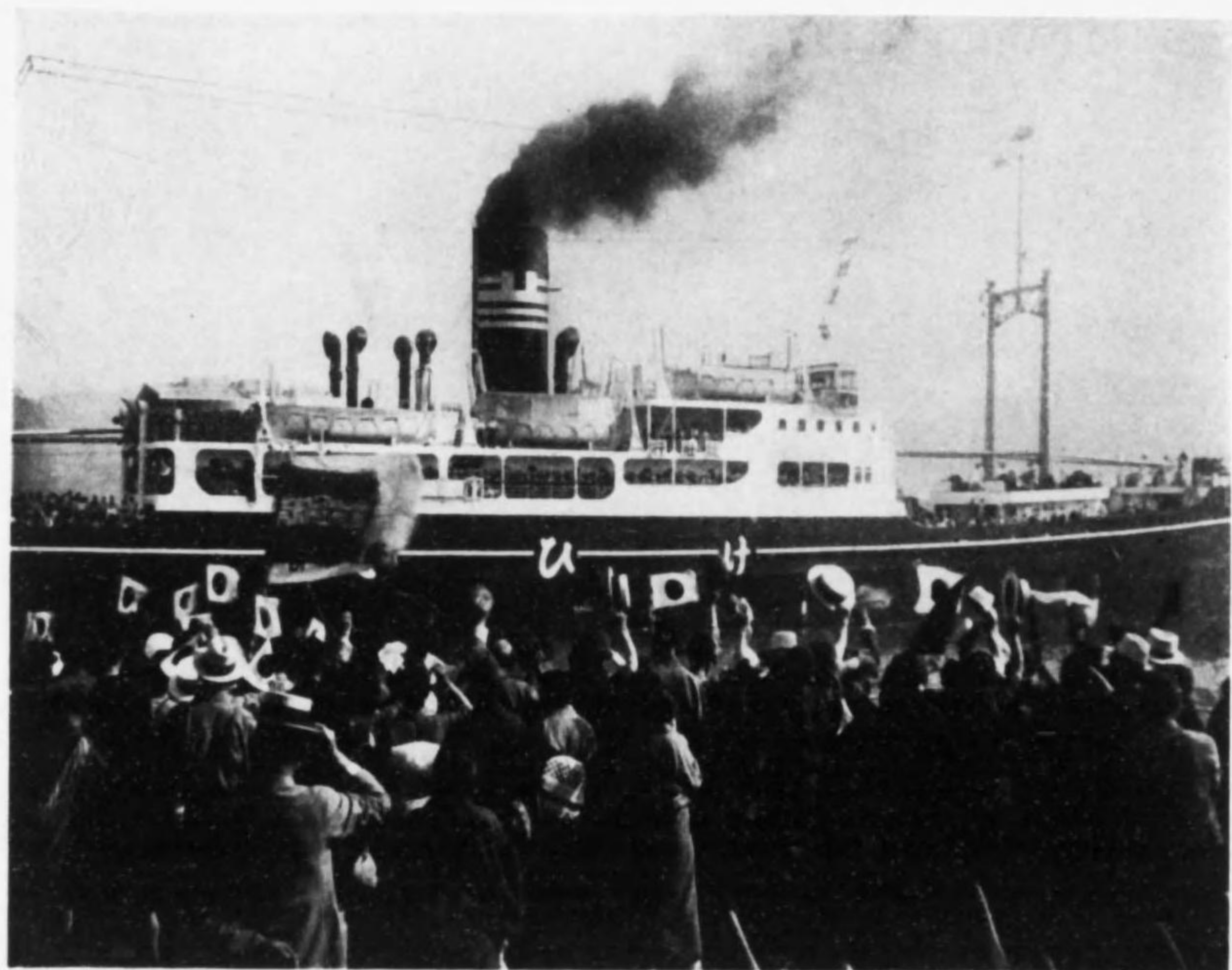
一、中京名古屋市に通ずる産業道路、謂ゆる名敦道路改修完了の曉には、名古屋よりの出貨は直接岸壁に輸送せらるゝに便宜となり、一面米原敦賀間鐵道複線工事完了と相俟つて、之が輸送力増大し、名古屋、阪神との連絡密接となる特質を有せり。

一、海濱に面積二十四萬坪を抱擁する、本邦有数の自然松林「名勝氣比の松原」在り、外遊客は勿論市民の健康地存せり。

一、官幣大社氣比神宮、建武中興に有名なる金ヶ崎宮、尊皇志士武田耕雲齋外數百名の英靈眠る墳墓の地等、名勝舊蹟に富み、子弟の教育に最好適地なり。

亞歐連絡船 氣比丸 (一)

興亞の拓土を乗せて出帆の景

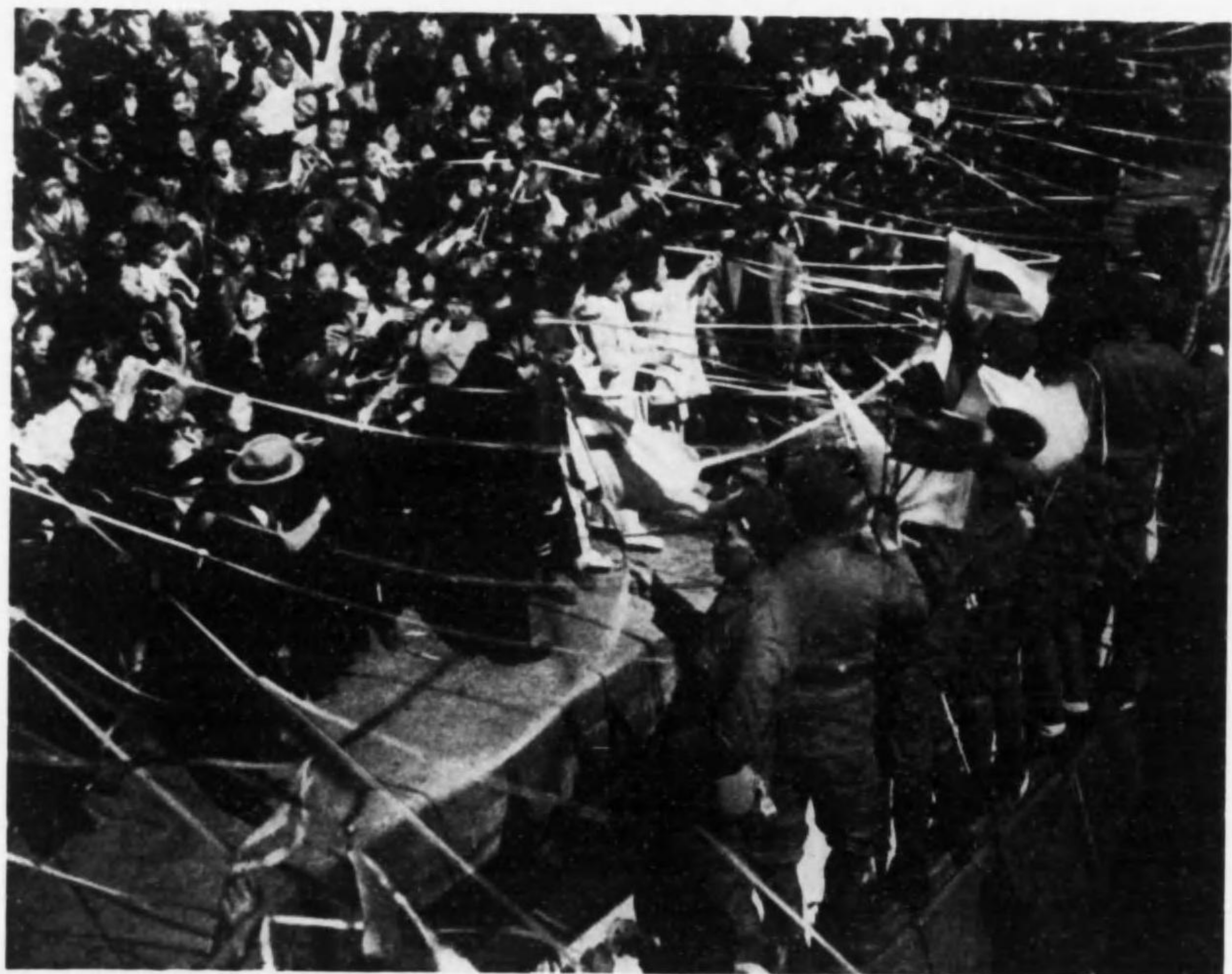


亞細亞郵船 庚戌

亞細亞郵船株式會社
庚戌年九月廿一日
由上海開往神戶
船名亞細亞
船長 佐藤 清
大司馬 佐藤 清
二司馬 佐藤 清
三司馬 佐藤 清
四司馬 佐藤 清
五司馬 佐藤 清
六司馬 佐藤 清
七司馬 佐藤 清
八司馬 佐藤 清
九司馬 佐藤 清
十司馬 佐藤 清
十一司馬 佐藤 清
十二司馬 佐藤 清
十三司馬 佐藤 清
十四司馬 佐藤 清
十五司馬 佐藤 清
十六司馬 佐藤 清
十七司馬 佐藤 清
十八司馬 佐藤 清
十九司馬 佐藤 清
二十司馬 佐藤 清
二十一司馬 佐藤 清
二十二司馬 佐藤 清
二十三司馬 佐藤 清
二十四司馬 佐藤 清
二十五司馬 佐藤 清
二十六司馬 佐藤 清
二十七司馬 佐藤 清
二十八司馬 佐藤 清
二十九司馬 佐藤 清
三十司馬 佐藤 清
三十一司馬 佐藤 清
三十二司馬 佐藤 清
三十三司馬 佐藤 清
三十四司馬 佐藤 清
三十五司馬 佐藤 清
三十六司馬 佐藤 清
三十七司馬 佐藤 清
三十八司馬 佐藤 清
三十九司馬 佐藤 清
四十司馬 佐藤 清
四十一司馬 佐藤 清
四十二司馬 佐藤 清
四十三司馬 佐藤 清
四十四司馬 佐藤 清
四十五司馬 佐藤 清
四十六司馬 佐藤 清
四十七司馬 佐藤 清
四十八司馬 佐藤 清
四十九司馬 佐藤 清
五十司馬 佐藤 清
五十一司馬 佐藤 清
五十二司馬 佐藤 清
五十三司馬 佐藤 清
五十四司馬 佐藤 清
五十五司馬 佐藤 清
五十六司馬 佐藤 清
五十七司馬 佐藤 清
五十八司馬 佐藤 清
五十九司馬 佐藤 清
六十司馬 佐藤 清
六十一司馬 佐藤 清
六十二司馬 佐藤 清
六十三司馬 佐藤 清
六十四司馬 佐藤 清
六十五司馬 佐藤 清
六十六司馬 佐藤 清
六十七司馬 佐藤 清
六十八司馬 佐藤 清
六十九司馬 佐藤 清
七十司馬 佐藤 清
七十一司馬 佐藤 清
七十二司馬 佐藤 清
七十三司馬 佐藤 清
七十四司馬 佐藤 清
七十五司馬 佐藤 清
七十六司馬 佐藤 清
七十七司馬 佐藤 清
七十八司馬 佐藤 清
七十九司馬 佐藤 清
八十司馬 佐藤 清
八十一司馬 佐藤 清
八十二司馬 佐藤 清
八十三司馬 佐藤 清
八十四司馬 佐藤 清
八十五司馬 佐藤 清
八十六司馬 佐藤 清
八十七司馬 佐藤 清
八十八司馬 佐藤 清
八十九司馬 佐藤 清
九十司馬 佐藤 清
九十一司馬 佐藤 清
九十二司馬 佐藤 清
九十三司馬 佐藤 清
九十四司馬 佐藤 清
九十五司馬 佐藤 清
九十六司馬 佐藤 清
九十七司馬 佐藤 清
九十八司馬 佐藤 清
九十九司馬 佐藤 清
一百司馬 佐藤 清

亞歐連絡船 氣比丸 (三)

滿洲開拓民衆送の景

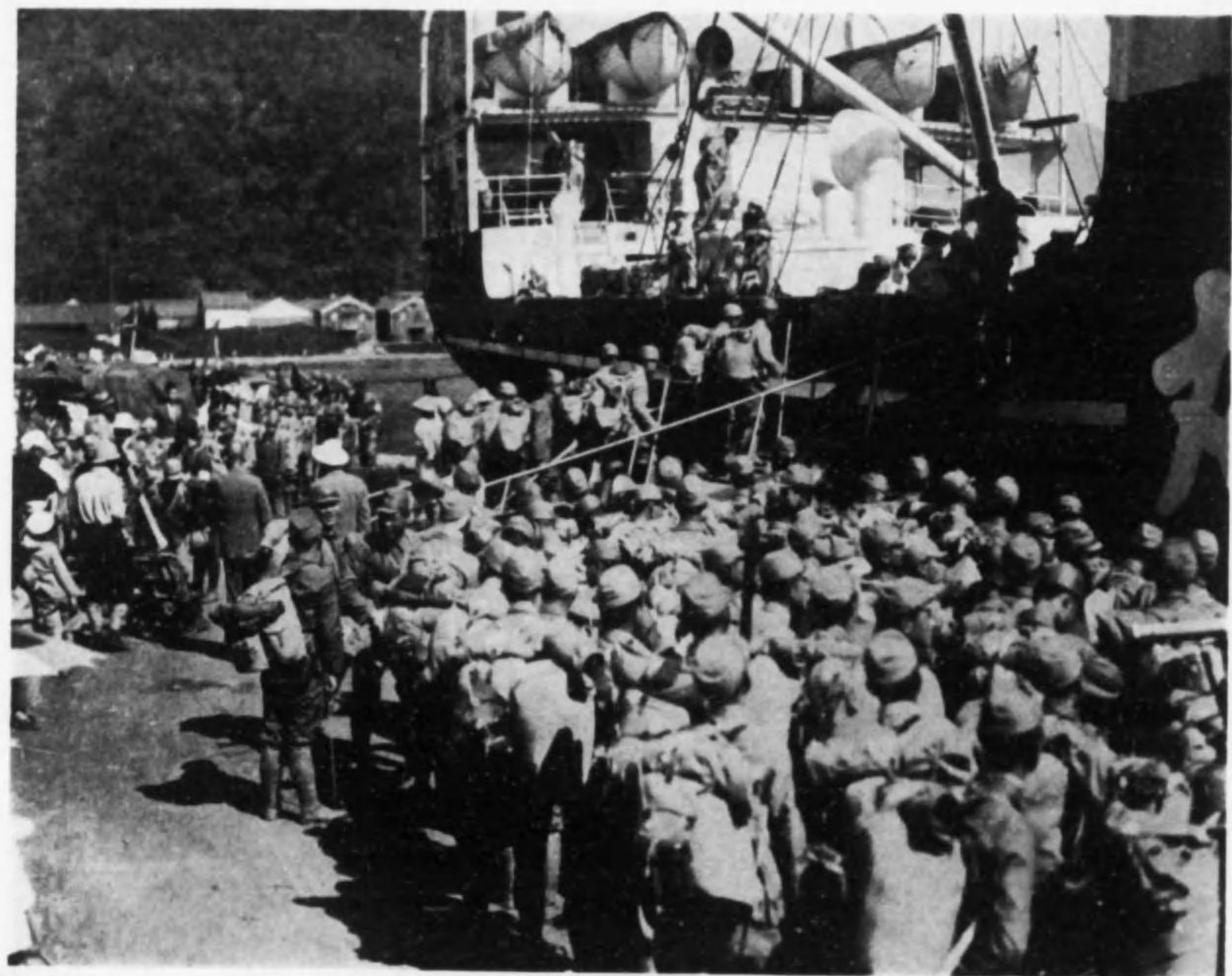


亞細亞雜誌 第五卷 第五期

一九三四年五月

亞歐連絡船 氣比丸 (三)

滿洲開拓青少年義勇軍乗船の景

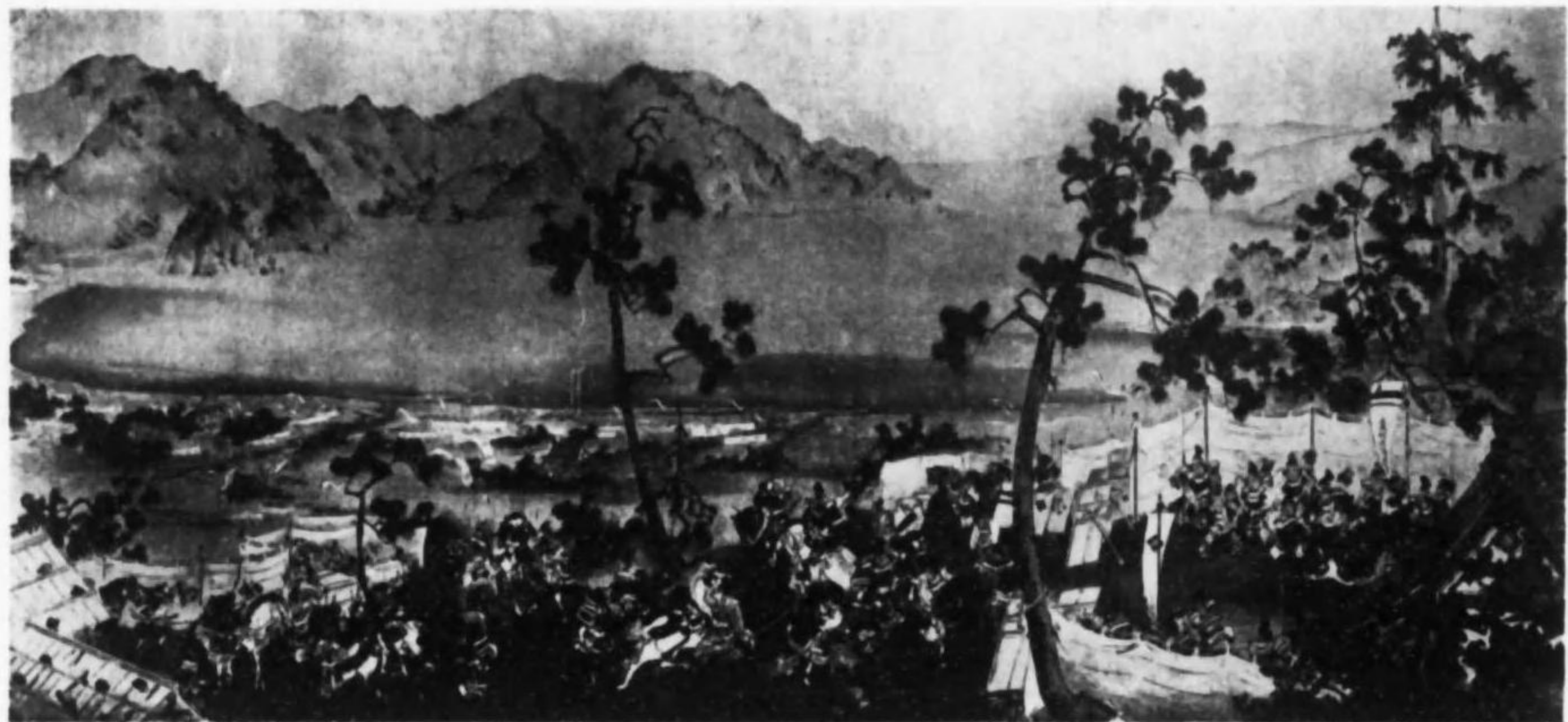


亞細亞煤油公司

亞細亞煤油公司

金崎奮戦之古圖

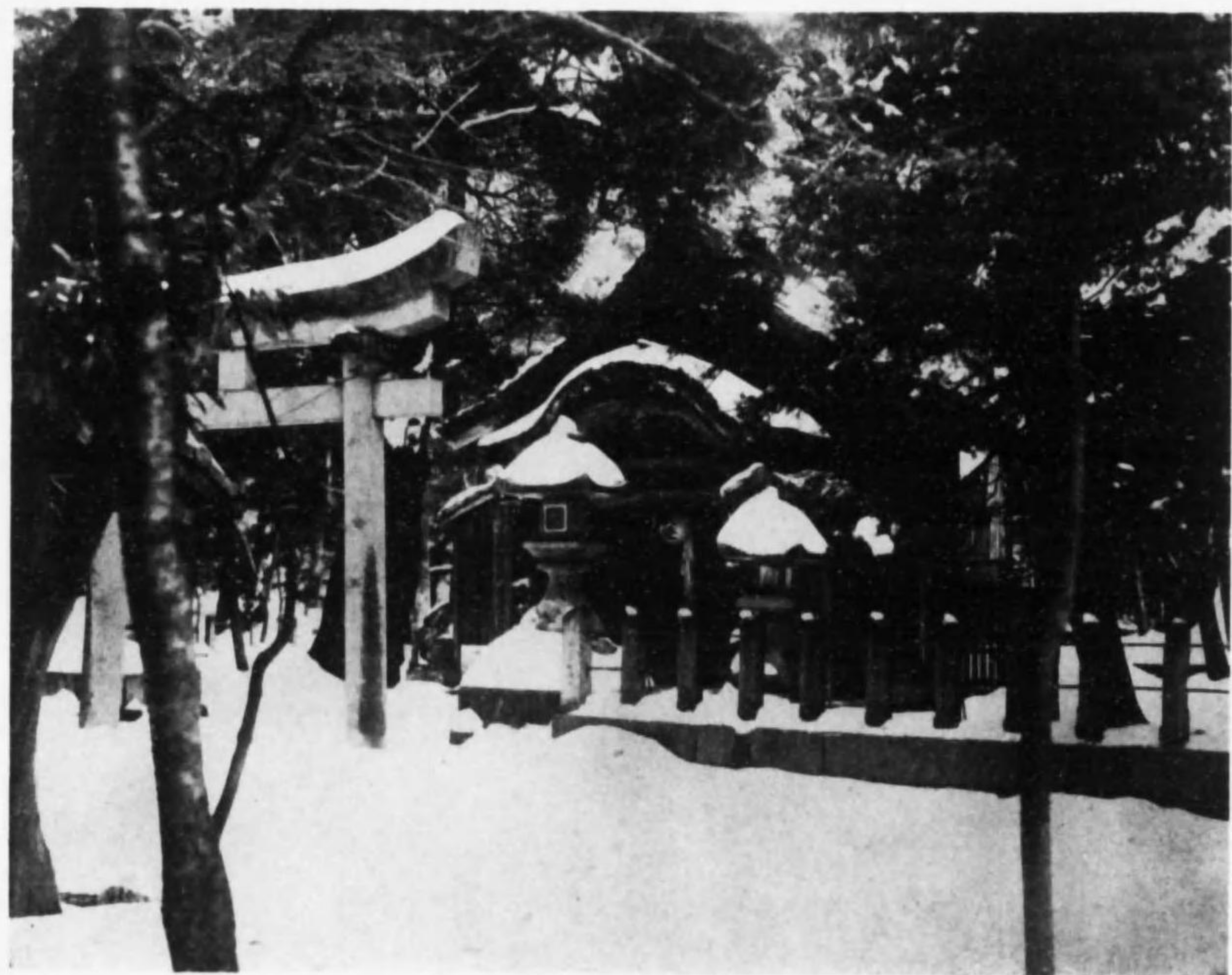
本圖は後世太平記により畫く所なり、延元二年大宮司氣比氏治公
父子以下多數殉忠護國の神となる。當時殉戦將士は現に官幣中社
金崎宮攝社胡掛神社に祀らる。



Faint, illegible text, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

攝社 角鹿神社

祭神都怒我阿羅斯等命は任那の王子にして敦賀地方開發の功勞神なり、崇神天皇末期に來朝簡飯(敦賀)港に上陸し朝貢の使命を果して、後勅により簡飯の政所の長官兼氣比神宮大宮司となると傳ふ。日本紀によると簡飯の地名は此命の御名に因み角鹿と改められ更に養老年間敦賀と改字す。



第五 内閣府

官幣中社金ヶ崎宮

南朝の史蹟

金ヶ崎城趾に在り、尊良、恒良兩親王を祀る。附近一帯名所舊蹟に富み眺望又雄大なり。



富田中野神社

富田中野神社
富田中野神社
富田中野神社
富田中野神社

縣社 常宮神社

郊外常宮の海濱に在り、天八百萬比咩神、仲哀天皇、神功皇后を
祀る。世に安産の神様として知らる。



鳥居

鳥居の背後に、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

鳥居の左側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の右側には、石造りの建物が建っている。

鳥居の背後には、大杉の森が広がっている。

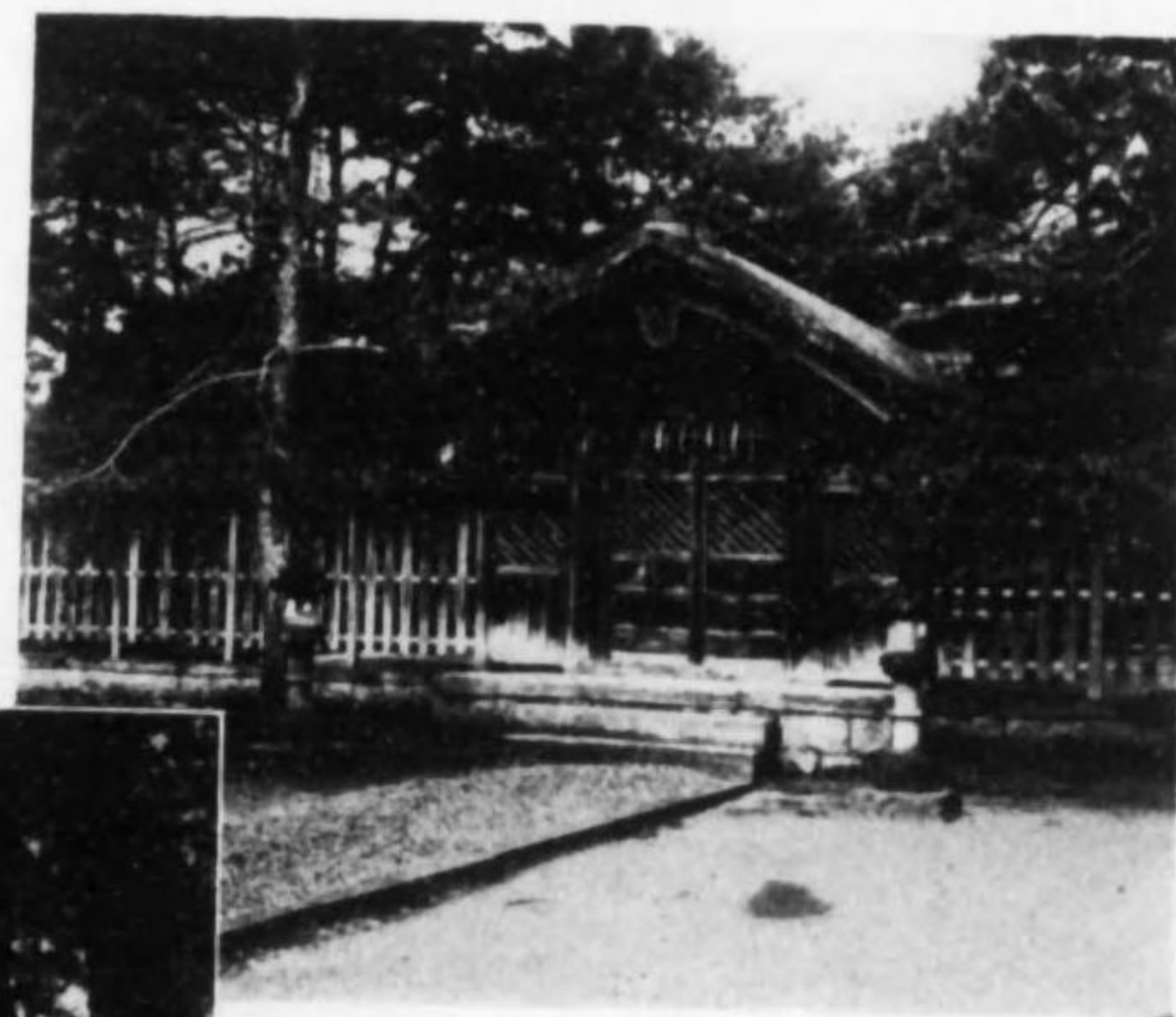
松原神社と水戸烈士の墓

勤王の志士、武田伊賀守耕雲齋以下三百五十三士を祀る。

討つもはた討たるゝもはた哀れなり

同じ日本のみだれと思へば

(武田耕雲齋辭世)



松尾重太郎の墓

松尾重太郎 生没年不詳 没年不詳

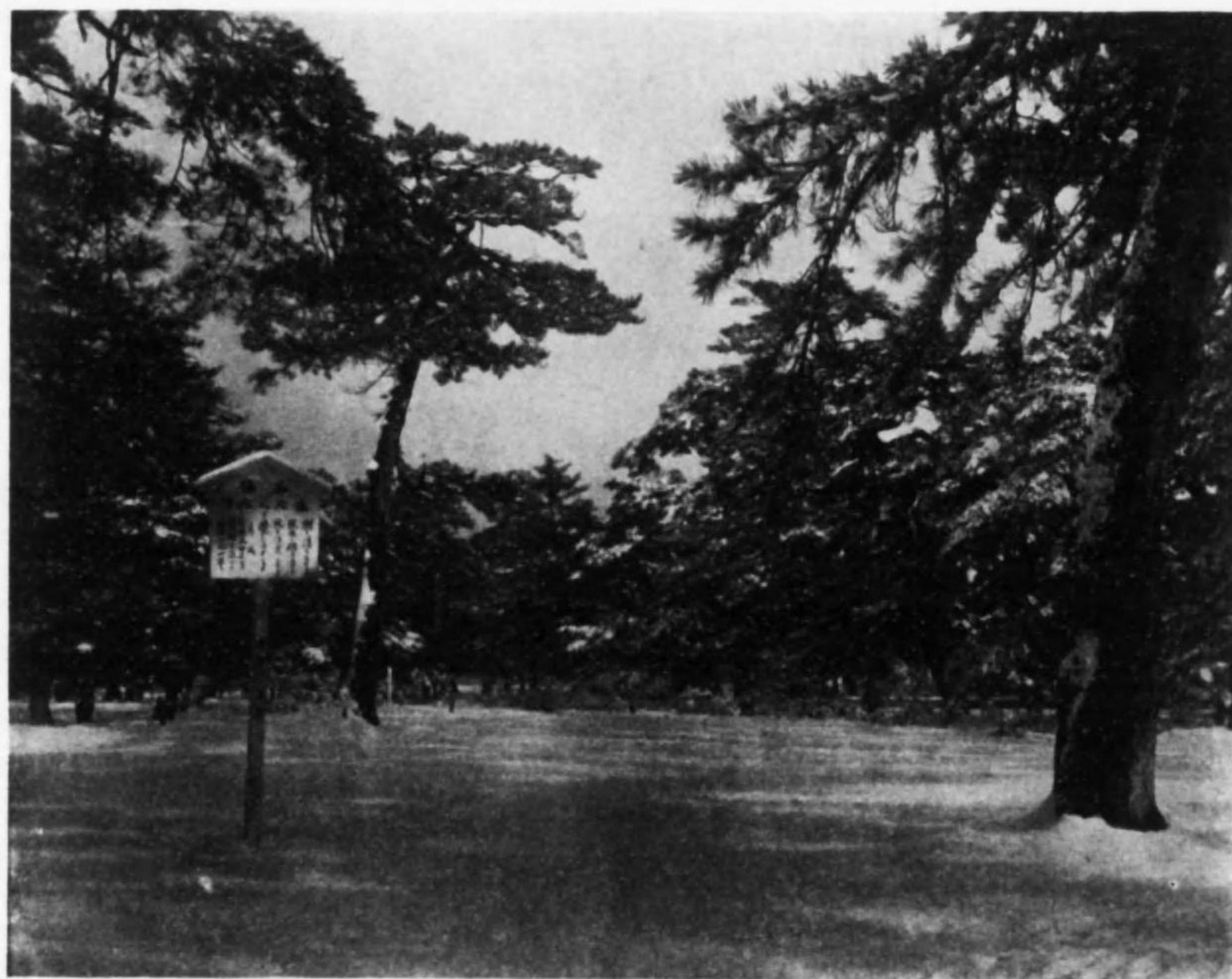
墓所 松尾重太郎の墓

所在地 松尾重太郎の墓

備考

名勝氣比の松原

白砂青松風光明媚、文部大臣指定の名勝にして廿五萬坪の大公園なり。



古蹟其の分照

敦
賀
市
廳
舎

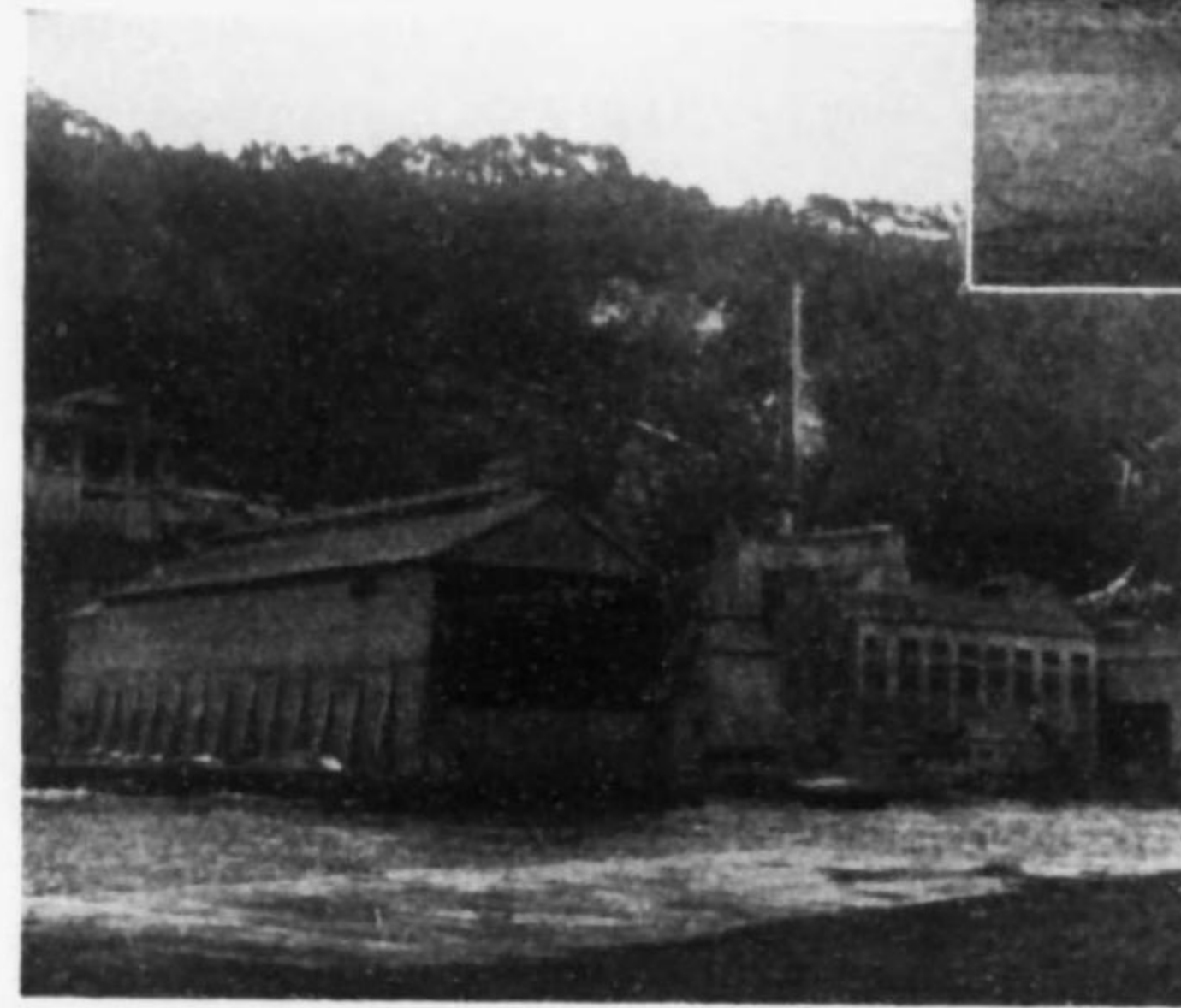


敦賀商工會議所

寶買商工會雜誌



東洋紡績敦賀工場
敦賀セメント工場



東京電力株式会社
東京電力株式会社
東京電力株式会社

氣比神宮、日本海、大陸

興 亞 特 急

北日本汽船株式會社の敦賀、清津、浦鹽間を運航する新造船氣比丸は敦賀の官幣大社氣比神宮に因んでつけた船名である。先ごろの大阪政治經濟研究會の滿支視察の出發は、道を北陸の敦賀港にとり、まづこの氣比の神宮に詣で、端なくも遠き上つ代の昔、畏くも仲哀天皇、神功皇后の三韓征伐の御事蹟を、大神の神饌まします神域に出緒深き角鹿（敦賀の舊名）の港に追憶し奉る機會を得た。當日、東道の任に當つた青年市長、若林敦賀市長は、國防服に日焼の顔を絶えずにこゝくと、若葉の綠に映ゆる廣前に立つて宮の御由緒を何かと一行に説明してくれた。そもこの氣比神宮と申すは仲哀天皇、神功皇后、應神天皇をはじめ奉り、仲哀天皇の御父、日本武尊、神功皇后の御妹玉姫命ならびに武内宿禰の六柱とはかにいまい柱伊香沙別命と申す御神を合せ、七柱の大神を齋き奉り、延喜以來七柱とも揃つて官幣大社の奉幣に預らせらるゝところの、他に類ひなき大宮である。

日本武尊をはじめ奉り、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇、武内宿禰の御偉績は、千古史上に燦として輝くところであり、當時國內には、まだ全く皇威に服さなかつた、熊襲や東夷の御征討に御盡瘁あらせられつゝ、さらにまたかれら匪賊の背後にあつて、陰に陽にこれを操つて来た三韓經略に終始御心を傾けさせられたといふことは、今日一層われわれ國民の胸奥に深い感激を覺えしむるものである。

また伊香沙別命と申すは、筒飯大神または御食津大神とも稱へ奉り、神代の昔から早くもこの地に鎮座まします北陸地方開拓の任に當らせられた御神と拜察し奉る。しかして神宮境内本殿東方の攝社角鹿神社の祭神、角鹿國造の祖、建功狹日命は朝鮮より渡來せる王子なりといひ傳へられ、また敦賀の地名は角鹿なる朝鮮語の轉化であらうとのことである。

かやうに、氣比神宮に神饌まします神の御事蹟をそれからそれへと追憶し奉るとき、上つ代における大陸と日本國との關係交渉の經緯、内治外交の經緯など今日の時局に照らして一しは思ひを深めしむるものが多い。それにつけても、かゝる千古の昔から萬古の末ま

で、無窮につづく皇國の歴史そのものこそ、萬古不易の國體であり、萬世一系の天啓の下に生々發展する民族の姿である、こゝにわれわれは無限の力と不滅の精神を感得することができらる。

また敦賀の港は、主代大陸交通の要衝として、渤海國の使節を接見せし齊景寮が氣比松原の海濱に設けられてあつたといふことである。しかして今後滿蒙開拓民が二十ヶ年間に百萬戸、五百萬人の大量進出とともに、大陸開發の戦士、青少年義勇軍も毎年多數に送り出さるべく、これに加へて滿洲國が先ごろ決定した國境建設、北邊振興事業の面に要求せらるる商工移民の大量が、この港や新潟港などから日本海を直航して大陸めざし多角的民族的進出を遂げることと思つて、肇國の大理想と不滅の國體に生くるわが大和民族の幸福を泌々と感ずるのである。

これと同時に、一切の國力は、決してわれわれ現代人のみの方でなく、悠久の昔から民族の魂に育くまれ、血に傳へられた傳統の力であることを知るとともにさらに、これら過去から現在への傳統の力のうへに、天壤無窮の將來に向つて生々發展を期する過去未來に通ずる民族理念の力であることを感ぜらる。

筆者は和歌山縣出身、栗本鐵工所社長
大阪政治經濟研究會常任委員長

栗本 勇之助氏

(昭和十四、八、一六 大朝夕刊掲載)

〔敦賀憲兵分隊檢閲濟〕

昭和十五年三月十一日印刷
昭和十五年三月十五日發行

敦賀市役所内
官幣大社氣比神宮
遷座祭慶祝奉贊會
發行所
大阪市南區安堂寺通一丁目
印刷所 濱田印刷所

終

